



アートストリーム2011 in 心斎橋  
大阪21世紀協会賞受賞

## 不思議な感覚

きらめく波に乗って新天地をめざす満帆の船、大空を翔る極彩色の鳥、色とりどりの草花や木々。河野里美さんがつくる影絵の魅力は、その緻密で溢れ出るような美しい色使いと物語性にある。幻想的な作品世界に、大人は子どもの頃の夢を、子ども

もは未知なるものへの好奇心を呼び覚まされることだろう。影絵の中に、別の世界が実在するかのような不思議な感覚。それは、作品自体が本当に“光”を放っているからこそ感じるものだ。

「暗闇のなかに明かりがあると安心する感じ。夜、帰ってきて家の明かりを見るとほっとするような。そんな安心感が好きなのかも」

そう話す通り、作品が放つ多彩な光からは、語りかけてくるような温もりや親近感が伝わってくる。

河野さんのカラー影絵に独特の質感があるのは、切り抜いた黒い紙の裏に、自分で染めた和紙などを貼って色を出しているから。トレーシングペーパーを重ねて微妙なグラデーションを表現するなど、“自分の色”の追求に妥協はない。歌舞伎の衣裳などからインスパイアされた幾何学的な模様を配することも。それらはすべて独学で会得した技法だ。旅行したり、好きなミュージカルを観たり、散歩中に見つけた草花の形など、日々の感動のストックを表現しているのだという。

## 創作パワーの源泉

河野さんが初めて影絵と出会ったのは高校3年生

のとき。美大受験に備えて勉強をするなかで藤城清治氏の作品を知り、その世界観に魅了された。大阪芸術大学映像学科に進学してからは、アニメーション映画の制作に影絵の技法を取り入れたりもした。

本格的にカラー影絵の制作をはじめたのは大学を卒業した2005年。大阪市内の旅行会社に勤めるかたわら、大阪や東京で個展を開く二足のわらじ生活は多忙を極めた。制作が深夜におよび、床に寝転がったまま朝を迎えたことも。それでも続けていきたいと思ったのは、河野さんの作品を観て楽しんでくれる人たちがいたからだ。「観ていただいた方の感想も参考になります。それを自分のなかで消化し、新たな表現や作品づくりのパワーにもなるんです」と微笑む。

## チャンスは逃したくない

「大阪でアートイベントが開催される機会は少ないので、チャンスは絶対逃したくなかった」という河野さんは、2006年秋のアートストリーム(湊町リバープレイス)に初出展して以来、毎年出展している。2008年には大阪芸術大学賞、2011年には大阪21世紀協会賞を受賞した。なかでも2009年は、来場者の目にとまったことがきっかけで、東洋紡グループ2012年企業カレンダーの制作依頼を受注。約2年間かけた大作は、『第63回全国カレンダー展・日本印刷産業連合会会長賞』を受賞した。2010年夏に会社を辞めてからは創作活動に専念。これまでの作品は50~60点を数える。

「いつも新しい手法や要素を取り入れたいと思いながら作っています。壁面いっぱい的大作や、待ち合わせのシンボルになるような作品、映像やアニメーション、大きな会場での原画展。やりたいことがいっぱいなんです」

笑顔で話す河野さんに、アーティストのほとぼる創作意欲と信念を感じた。

(ライター 三上祥弘)

語りかけてくるような幻想的世界  
影絵アーティスト 河野里美さん

夢の架け橋(2012年)



©Satomi

Dream Journey(2012年)



©Satomi

